

野菜・花の害虫（チョウ目害虫）

○様々な作物を加害する（広食性）ガの仲間

ハスモンヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ、タマナギンウワバ、ネキリムシ類（タマナヤガ、カブラヤガ）は、寄主範囲が広く様々な作物を食害するチョウ目害虫である。

特に、ハスモンヨトウやオオタバコガは薬剤感受性が低く防除が難しい。

これらの他に、近県ではシロイチモジヨトウの加害が問題になることがある。本県ではフェロモントラップによって雄成虫は誘殺されるが(1995～2004年、2023年)、問題となるほどの発生は確認をしていない。

ハスモンヨトウ *Spodoptera litura* (Fabricius)

(1) 本県での発生状況

暖地性の害虫で、関東、東海地方以西で発生が多い。本県では8月頃から様々な作物で寄生が確認されるが、それ以前はほとんど幼虫の寄生を確認できない。本県の施設イチゴでも越冬するが越冬個体数は少ないと思われ、南方で増殖した個体が飛来し被害が発生すると考えられる。フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は年によって変動するが、おおよそ8月下旬頃から急激に増加する（典型的な発生消長を図示（図1））。

(2) 形態及び生態、被害の様子

卵塊で産卵し、卵塊は綿状の鱗毛で覆われる(写真1)。幼虫は2齢まで集団で、葉裏から表皮を残すように食害するため被害葉は白く透ける(写真2)。その後、分散し日中は日陰や地際部などに潜み、主に夜間に加害をする。極めて多食性で、広範な作物を加害するが(写真3, 4, 5)、特にイチゴでは新葉や花、蕾、果実も好んで食害し被害が大きい。加温施設では12月頃まで被害が発生する。老熟幼虫の体長は40mm程度で体色は灰暗緑色から暗褐色まで変異が大きい。幼虫の第4環節の両側に黒褐色の斑紋があり、他のヨトウ類と区別することができる。25～26℃での幼虫期間は15～23日、土中で蛹となり、25℃では11～13日で羽化する。成虫は前翅長16～17mmの中型の蛾で、翅は黒褐色、雄の前翅には斜めに淡褐色の線状紋が目立つ(写真6)。

(3) 防除対策

イチゴなどの施設では開口部に防虫ネットを展張し、産卵にきた成虫の侵入を阻止する。露地野菜類では幼虫寄生の初期に見られる白変葉などを目安に薬剤による防除を行う。ただし、幼虫の齢期が進むと薬剤の感受性が低くなり、効果が十分発揮されないので、フェロモントラップのデータなどを参考に誘殺数ピーク確認後等、防除適期を見極めることが重要である。

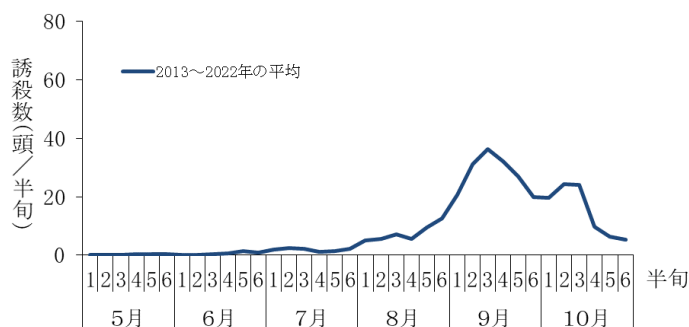


図1 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の誘殺数の推移(棚倉町)



写真1 ハスモンヨトウの卵塊と若齢幼虫



写真2 イチゴを加害する若齢幼虫



写真3 サトイモを加害する老齢幼虫



写真4 トルコギキョウの加害状況



写真5 ネギの加害状況



写真6 ハスモンヨトウ雄成虫

オオタバコガ *Helicoverpa armigera* (Hübner)

(1) 本県での発生状況

1990年代前半に関西地方で大きな被害が発生し、その後全国で問題になっている。本県ではフェロモントラップによる雄成虫の誘殺数が関東以西よりかなり少ないことから(図2)、発生量は少ないと思われるが、成虫が卵を1個ずつ点々と産卵するため、トマトなどの施設に雌が侵入すると被害が大きい。広範な作物を加害するが、本県では夏秋トマト、ピーマン、キク、トルコギキョウなどで発生が問題となる。

(2) 形態及び生態、被害の様子

卵は球形で直径0.5mm程度、新葉や芽の付近に1個ずつ生み付けられる。卵は2~3日でふ化し、若齢幼虫は新葉などを加害するが、中齢以降は果実や蕾、茎などに食入する(写真7,8)。老熟幼虫の体長は35~40mm、幼虫の体色は緑色から淡赤色まで変異が大きい(写真9,10)。25℃で幼虫は20日、老熟幼虫は地中に浅く潜って蛹化し、蛹期間は13日、年2~3世代を経過する。成虫は前翅長15mm内外、ハスモンヨトウと同程度かやや小さい。前翅は灰黄色から黄褐色まで変異が大きくタバコガ成虫と酷似している(写真11)。

(3) 防除対策

雨よけ栽培等では施設開口部に4mm目合い以下の防虫ネットを展張し、雌成虫の侵入を阻止する。薬剤による防除は発生初期に行わないと、果実等に食入するため効果が発揮されない。一般に8月頃からの被害が目立つが、年次や地域により発生時期が異なることも多いので、トマトや露地キクなどでは発生時期に頂芽付近を観察し、新葉の加害痕を指標として防除時期を決定すると適期を逃さない。

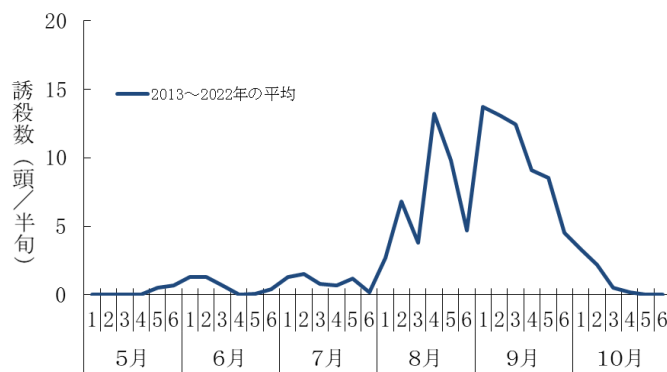


図2 フェロモントラップによるオオタバコガ雄成虫の誘殺数の推移(猪苗代町)



写真7 トマトの頂芽に食入する幼虫



写真8 キクの蕾に食入する幼虫



写真9 トマトの果実に食入する幼虫



写真10 ピーマン果実内の老熟幼虫



写真11 ニラの花で吸蜜する成虫

ヨトウガ *Mamestra brassicae* (Linnaeus)

(1) 本県での発生状況

幼虫はイネ科以外のほとんどの作物を食害するが、前記 2 種に比較すると薬剤が効きやすく被害は大きな問題になっていない。ブロッコリーやキャベツ等アブラナ科野菜類での加害がよく見られる。

(2) 形態及び生態、被害の様子

雌成虫は葉裏に 100~200 粒の卵塊で産卵するが、ハスモンヨトウのように卵に鱗毛をつけない。若齢幼虫は集団で加害し、葉をスカシ状に葉脈だけを残し食害する (写真 12)。幼虫の体色は 3 齢までは淡緑色 (写真 13)、その後は灰緑色から暗褐色など変異に富む (写真 14)。若齢幼虫の食害痕はハスモンヨトウとよく似るが、第 4 環節の両側に黒褐色の斑紋が無いことから判別できる。成虫は前翅長 18~23mm とハスモンヨトウよりやや大きい (写真 15)。年 2 回から 3 回発生し、第 1 成虫は 4~5 月、第 2 成虫は 9~10 月に見られ、夏期は蛹化後、土壌中で夏眠する。また、秋の低温短日条件により休眠し蛹体で越冬する。

(3) 防除対策

加害痕や幼虫寄生を確認したら薬剤防除を行う。



写真 12 ヨトウガ若齢幼虫



写真 13 ヨトウガ幼虫 (淡緑色個体)



写真 14 ヨトウガ幼虫 (暗褐色個体)



写真 15 ヨトウガ成虫

ウワバ類 (*Autographa* sp.)

(1) 本県での発生状況

幼虫は各種アブラナ科野菜類の他、ニンジン、ゴボウ、ダイズ、シソ、トルコギキョウ等多くの作物を加害する。本県ではブロッコリーやキャベツなどのアブラナ科野菜類でよく寄生が見られるが、大発生することはほとんど無い。トルコギキョウに寄生していた幼虫を捕獲し、飼育後成虫にして種を同定するとタマナギンウワバ、ケイギンモンウワバであったことから、幼虫体では判断がつかない複数の種が加害しているとも考えられる。

(2) 形態及び生態、被害の様子

産卵は葉裏に点々とし、集団で加害することは無い。幼虫は頭部が小さく、体の後方に向かって太くなり、腹脚がヨトウ類は4対あるのに対し2対である。シャクトリムシ状に歩行し静止時には第2・3腹節を山形に高くする(写真16)。5齢を経過すると外葉裏面に荒い繭をつくり蛹化する(写真17)。成虫の前翅長は16~18mm(写真18)。

タマナギンウワバの発生回数は東北地方で年3回、寒・高冷地では成虫及び幼虫で越冬するとされ、休眠性は無い。

(3) 防除対策

加害痕や幼虫寄生を確認したら薬剤防除を行う。



写真16 トルコギキョウを加害する幼虫



写真17 葉裏で荒い繭をつくる終齢幼虫



写真18 タマナギンウワバ成虫

ネキリムシ類（タマナヤガ *Agrotis ipsilon*, カブラヤガ *Agrotis segetum*）

（１）生態及び被害の様子

幼虫は土壌中に棲息し、夜間に地上に出現して定植後間もない作物の地際部をかじり倒す。ネキリムシ類の代表的種がタマナヤガ及びカブラヤガである。加害作物の範囲は広くウリ科、アブラナ科をはじめ多くの野菜や畑作物に被害が出る。タマナヤガは東北地方では越冬できないと言われ、春期に暖地から飛来した成虫が産卵・ふ化した幼虫が被害を出すと考えられている。カブラヤガは年 3～4 世代を繰り返し、春から秋まで切れ目無く発生する。両種とも畑の中で 1 匹ずつ分散しており、1 匹の幼虫が次々と別の株を加害するため生息密度が低くとも被害は大きくなる。

（２）防除対策

被害が発生してからの防除は非常に難しいため、例年被害が見られる場合は定植前または定植時に各作物に登録のある殺虫剤の土壌処理を行う。



写真 19 カブラヤガ成虫